公明新聞 2013 8/26 付

…魂　星周 著

…息子の悲哀を…、いずれも犬…篇を収める。…マウンテン・…の余命がいく…されたすれち…最期を看取る…わせるという…主人公はこう…の伴侶だ。人…、犬も人をよ…種族間には存…を持つ」「人間…を理解してい…問が残る。し…ことを深く…ことには疑…に思える」…ルメイトの…動的な愛犬小…で過激な暗黒…る人にはちょ…読者の魂に…の質は、やは…なのものだ。…人には大い…まだ飼って…感動を与え…680円）

シャルル・ドゴール

渡邊　啓貴 著

フランス救った英雄の苦闘を描く

フランス文学者　安達　正勝 評

ドゴールは強力なリーダーシップを発揮して、二度、フランスを国難から救った。最初は第二次世界大戦の時、ドイツとの戦いに敗れて方向を見失っていたフランス人にロンドンからラジオで「フランスは戦闘に負けた。しかし、戦争に負けたわけではない。なぜなら、この戦争は世界戦争だからである」とレジスタンス運動に立ち上がるよう呼びかけ、フランス人を結束させて勝利へと導いた。そして、それから十数年後、アルジェリア独立問題をめぐってフランスが内戦の危機にさらされた際にふたたび登場し、断固として独立を承認することによって見事に混乱を終息させた。

しかし、順調にキャリアを積んだ政治家では、けっしてない。ドイツとの戦いを呼びかける第一声を発した時、ドゴールは一軍人にすぎず、政治家としての実績はまったくなかった。だから、レジスタンス運動を一つにまとめるのも困難を極めたし、アメリカとイギリスに自分をフランス政府代表として認めさせるにも大変な苦労をした。そして「アルジェリア危機」で第一線に返り咲くまでの十数年間には「砂漠の横断」と言われる、長い不遇の時代があった。

ドゴールは現在の政体、第五共和政の産みの親でもある。政党政治に不信感を抱き、「主権が諸政党に代表されるばらばらな利害によってこま切れに存在しうるなどとは、到底容認できなかった」とドゴールは語っていた。第五共和政は「国民の直接的な信任によって権力を与えられた強い指導力をもつ大統領制度の完成」であった。

ドゴールはアメリカへの対抗意識が強かったことでも知られる。「偉大なフランス」を復活させるには、外交上自立する必要があった。軍事力、経済力などではアメリカにかなわないが、「フランスは普遍的文化の国だ」という自負心があった。

ドゴールには、ジャンヌ・ダルクやナポレオンの系譜につながる救国の英雄の風貌がある。本書を読めば、新鮮な驚きを感じつつドゴールの全体像を知ることができる。

（慶應義塾大学出版会　3360円）

◇

わたなべ・ひろたか　東京外国語大学大学院教授。